



医師を中心とした禁煙キャンペーンのあり方 (520)

たばこタールの発癌性を立証したのは日本の病理学者だ!!

広島市立安佐市民病院名誉院長 岩森 茂

古く昭和10年に南江堂より発刊された「実験腫瘍学」という本がある。当時の熊本医大教授 故森 茂樹氏、同助教授 故鈴江懐氏の共著である。当時、日本で初めて発行された腫瘍学の本で病理学者にとっては、垂涎(すいえん)に値する名著であった。本書の紹介は略すが、この本の中に有名な東大 故山極教授、故市川助教授(後に教授)によるコールタル人工癌発生成功の涙ぐましい努力の跡が記載されている。すなわち、家兎耳殻にコールタルを塗り続けることにより、パピローム→発癌に成功した経緯である。これはさらに故筒井教授らがマウスで成功、引き続いて各国の病理学者も成功している。その後、故勝沼教授らはコールタルよりも毒性の弱いたばこタールの塗布によっても発癌することを立証し、各国の学者の追試確認がなされた。この実験腫瘍学は実験病理医にとっては必須の書であり、当時の先端を行く研究が次々と紹介されている。

私事になるが昭和30年始め、抗生剤を始めとして癌進展に影響が疑われる薬剤投与の実験腫瘍への影響を追求した時代があるが、その時代に参考になったのが、恩師 故上村教授から贈与していただいたこの「実験腫瘍学」の名著であり、いまだに大切に保存している。

さて、故山極教授らの研究は当時の日本の有名な病理学者にとっても信用されない時期があり、「癌か膿か、はたまた頑か」と批判されたこともあったが、真実が追試などで立証されるに及んで、故山極教授には勲一等瑞宝章が授与され、さらにはノーベル賞候補にもなっている。いずれにしろ、それまでは伝統的に経験されてきた暖炉の煙突掃除夫に多発していた辜丸癌は、煙突内の煤(タールの塊)との接触が繰り返されることが発生原因として疑われていたことが、故山極教授らの研究で立証されたことにもなり、現今でいえば典型的な職業性発癌として公費による治療対策にもなったはずである。

さて、本論のむすびは次のようになると思われる。すなわち前文で述べたたばこタールの実験は、スモーカーが吸うほどの長い期間ではなかったが、その発癌性は100%実証されたのである。当時はタールのみに焦点が絞られていたが、その後の研究によりたばこ煙の中にはタールを始めとして30種以上の発癌物質が含まれており、さらに200種以上の発癌促進物質が存在していることが分かっている。たばこ発癌を否定するJTの諸氏も、上記の涙ぐましい努力によってタール癌発生の事実が確認された時代のことも確認してほしいのである。

厚生労働省版

禁煙支援マニュアル

厚生労働省(健康局総務課生活習慣病対策室)において、禁煙支援マニュアルがとりまとめられました。日常の禁煙指導にお役立て下さい。

なお、内容は厚生労働省ホームページ「たばこと健康に関する情報ページ」で閲覧することができます。

◆禁煙支援マニュアル

URL <http://www.mhlw.go.jp/topics/tobacco/main.html>

CD-ROM*の必要な方は県医師会総務課までご連絡下さい。

※平成15年、16年度厚生労働科学補助金(主任研究者 中村正和)により製作されたものです。

TEL: 082-232-7211 <広島県医師会禁煙推進委員会>